

## 【和牛繁殖経営】分娩間隔短縮による生産費の低減

畜産酪農研究センター 芳賀分場 肉牛飼養研究室

和牛繁殖経営においては、分娩間隔を短縮し、効率的に母牛に子牛を産ませることが最も大切です。分娩間隔を短縮することで、1回の分娩にかかる母牛の飼料費が低減するとともに、子牛の出荷頭数が増え、粗収入の増加につながります。

### 1年1産を実現するためには

- 1 分娩前後のやせすぎ、太りすぎに注意し、適切な栄養状態を保ちましょう。
- 2 遅くとも分娩後4か月以内には離乳し、発情回帰を促しましょう。
- 3 朝夕の観察を徹底し、発情発見に努めましょう。そして、分娩後90日以内に授精し、受胎させるようにしましょう。
- 4 発情のない牛は早期に治療しましょう。

牛の観察に力を入れましょう

### 分娩間隔の短縮により、母牛の飼料費（分娩1回あたり）が低減

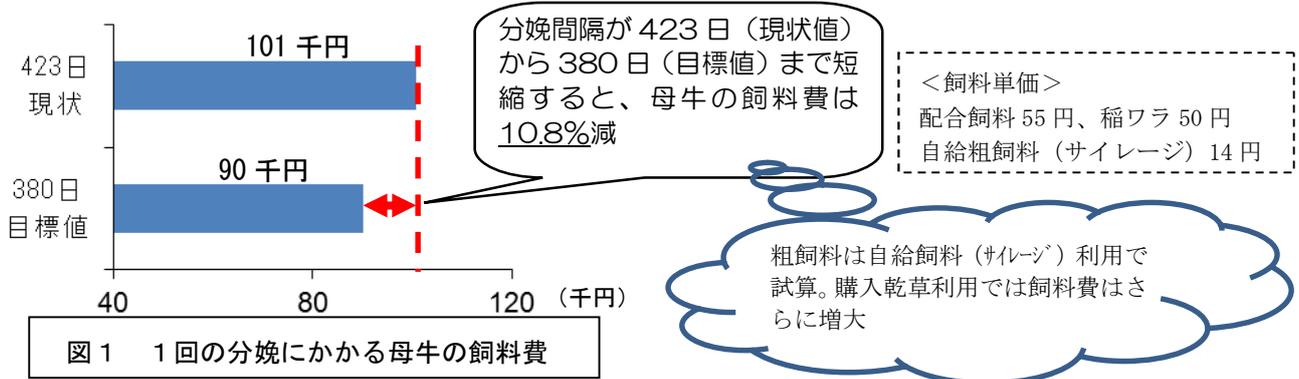


図1 1回の分娩にかかる母牛の飼料費

### さらに 分娩間隔の短縮で粗収入も増加

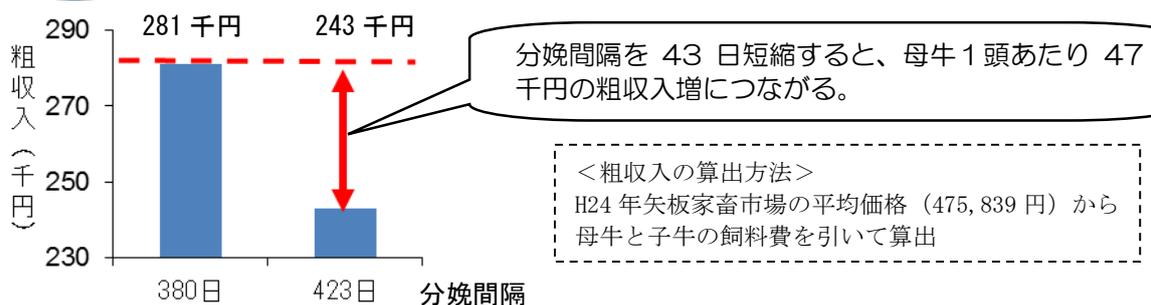


図2 母牛1頭あたりの粗収入（1年あたり）

飼料費が高いときには、分娩間隔を短縮して1産あたりの飼料費を低減する経営方法も検討する価値があります。

<参考>

本県の肉用牛の受胎率は、平成元年の調査では72.5%でしたが、平成18年は63.0%、平成19～22年は55%以下で推移しており、近年、低下傾向にあります。（家畜改良事業団受胎率調査成績）

平均分娩間隔も423日（平成22年）と、目標とする380日を大きく上回る現状です。

表 平均分娩間隔の現状

H22 黒毛和種の分娩間隔 (全国和牛登録協会)	栃木県	423 日
	全国	416 日
栃木県家畜改良増殖計画目標値		380 日